

吉水流詠歌集

音 譜 用

浄 土 宗 吉 水 講

吉水講信条

わたくし
私たちはこの詠唱を通じ

- 一、篤く三宝を敬い、仏祖の恩徳おんごくに報います。
- 一、元祖法然上人の教えを体し、この道の興隆に励みます。
- 一、互いに助けあい、念仏をよろこびます。
- 一、自らのつとめにいそしみ、家庭の平和を念じます。
- 一、広く同信を募り、社会の浄化につとめます

吉水流詠歌集

編集 松濤基道

浄土宗吉水講

〔詠題のピッチと唱え方〕



「ごえーかに」「ごわさんに」の部分はそれぞれの曲のテンポで唱えます。

〔記号の説明〕

- 鉦をうつ
- × 鈴をならす
- ⊗ 鈴・鉦を同時にならしうつ
- 鉦を小さくうつ
- 鉦を小さくうっておさえる
- 鉦をうっておさえる
- ⊗ 鈴・鉦同時にうちならし
直ちにおさえる
- ☆ = スズをふる
- ☆~~~~~ スズをふりつづける
- ! = かいしゃくをうつ

- p* = よわ (よわく)
- mp* = やよ (ややよわく)
- f* = つよ (つよく)
- mf* = やつ (ややつよく)
- ! : | くりかえす
- rit.* だんだんゆっくり
- molto rit.* もっとゆっくり
- V いきつき
- j 半拍で声をきる

〔速さ表現のめやす〕

- ♪ = 60 速く唱える
- ♪ = 50 普通の速さで唱える
- ♪ = 40 ゆっくり唱える

抑^{そもそ}もわが大師^{だい し}法然^{ほうねん}上人^{しょうにん}は、崇徳^{す とくいん}院^{ぎょう}の御宇^{うちょうしょう}長承

二年^{にま}四月^{よしかのくに}七日^{たんじょう}美作^{たま}国^{このつ}に誕生^たし給^{たま}い、九歳^{ここのつ}にして

非業^{ひ ごう}の刃^{やいば}に父^{ちち}を亡^{うし}ない、その遺言^{ゆいごん}わすれがたく、

十五^{はるはじ}の春^{えいざん}初めて叡山^{のぼ}に登^{しゅうがく}りて習学^{たま}し給^{ち え}い、智慧

第一^{だいいち}のほまれたかく、圓宗^{えんしゅう}の棟梁^{とうりょう}とならんとう

たわれたまう。然^{しか}れ共^{ども}ひとえに名利^{みょうり}を捨^すてて、

末世^{まつ せ}の凡夫^{ぼん ぶ}ことごとく救^{すく}わるべき道^{みち}をもとめて

勤苦^{ごん く}二十^{じゅう}有^{ゆう}餘^よ年^{ねん}ついに承安^{じょうあん}五年^ご春^{しゅん}三月^{み だ しゃ}、弥陀^{み だ}釈^{しゃ}

迦^か二尊^{に そん}の元意^{がん い}を悟^{さと}り、たちどころに餘行^{よぎょう}を捨^すて

て、一向^{いっこう}に本願^{ほんがん}念佛^{ねんぶつ}の一行^{いちぎょう}に帰^きし給^{たま}えり。齡^{よわい}八

十にして御入滅^{ごにゅうめつ}にいたるまで、あまねく化導^{けどう}い
たらざることなし。大師^{だいし}の曰^{のたま}わく跡^{あと}を一廟^{いちびょう}にと
どむれば遺法^{ゆいほう}あまねからず。念佛^{ねんぶつ}の声^{こえ}するところ
ろみなわが遺跡^{ゆいせき}なりと。然^{しか}れども末葉^{まつようきん}欣慕^ぼして
由^{ゆいしよふか}諸深^{しよふか}き二十五^{にじふご}の靈地^{れいち}をえらび、大師^{だいし}の御歌^{おうた}を
もつて讃歎^{さんだん}したてまつる。願^{ねが}わくば大師^{だいし}上人^{しやうにん}慧^え
光^{こう}親^{した}しくわれらを照^{てら}し、現前^{げんぜん}の弟子^{でし}等^{とう}が丹誠^{たんぜい}を
納^{のうじゆ}受^{たま}し給^{たま}え。

目 次

第 一 番	法然上人ふたはたの御詠歌	6
第 二 番	法然寺の御詠歌	8
第 三 番	ふるさとの御詠歌	10
第 四 番	如来院の御詠歌	12
第 五 番	柴の戸の御詠歌	14
第 六 番	うつせみの御詠歌	16
第 七 番	一心寺の御詠歌	18
第 八 番	報恩講寺の御詠歌	20
第 九 番	往生院の御詠歌	22
第 十 番	かぐ山の御詠歌	24
第 十一 番	春の御詠歌	26
第 十二 番	欣浄寺の御詠歌	28
第 十三 番	きよみずの御詠歌	30
第 十四 番	小松谷の御詠歌	32
第 十五 番	源空寺の御詠歌	34
第 十六 番	花のうてなの御詠歌	36
第 十七 番	二尊院の御詠歌	38
第 十八 番	月かげの御詠歌	40

第 十 九 番	京都法然寺の御詠歌	42
第 二 十 番	誓願寺の御詠歌	44
第二十一番	秋の御詠歌	46
第二十二番	夏の御詠歌	48
第二十三番	冬の御詠歌	50
第二十四番	池の水の御詠歌	52
第二十五番	弥陀本願の御詠歌	54
かりそめの御詠歌		56
至誠心の御詠歌		58
鹿ヶ谷法然院の御詠歌		60
蓮のうてなの御詠歌		62
二世安樂の御詠歌		64
青龍寺の御詠歌		66
増上寺の御詠歌		68
善導寺の御詠歌		70
善光寺の御詠歌		72
鎌倉光明寺の御詠歌		74
選擇集の御詠歌		76

第一番 誕生寺の御詠歌（霊場調）

（法然上人ふたはたの御詠歌）

松 濤 基 作曲

♩ = 53



〔斉唱〕

○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × × ○
ふ - たはたの - あま - く だ - り ま す むく - の き -



○ × × ○ ○ × ○ × ○ × ☒ × × ×
は よ よ に く - ち せ - ぬ の - り の し -



○ × ○ ×
の - あ - と -

第一番 美作の国 誕生寺

ふたはたの 両幡の あまくだ 天下ります むく 椋の木は よよ 世に朽ちせぬ のり 法の師のあと
(法力坊蓮生作)

誕生寺は、長承^{ちやうしやう}2年(1133)4月7日に、法然上人がお生まれになった屋敷の跡であります。このお歌は、坂東武者熊谷直実^{ばんどう む しゃくまがいの おぎね}が法然上人のお弟子となり、法力坊蓮生^{ほうりきぼうれんせい}と号し、法然上人御自作の御像を背負って、御両親のお墓に代参された時のお歌であります。法然上人の御両親が岩間の観音に願を掛け、お母様は剃刀^{かみそり}を飲む夢を見て、懐妊遊ばされました。上人がお生まれになった時、庭の椋^{むく}の木に白い幡^{はた}が二流れ飛んで来て輝いたという奇瑞を教えられていた蓮生坊^{れんせいぼう}が、その椋の木を仰ぎ見た時の感激を詠まれました。

大意 お師匠様がお生まれになった時、白い幡が二流れ飛んできて掛かり、美しく輝いていたという椋の木。お師匠様は罪深い私でもお念仏により阿弥陀さまのお浄土へ救いとられてゆくと教えて下さいました。お念仏の教えは、今までも、今も、そしていついつまでも決して朽ちることがありません。この椋の木は、天も喜ばれたお師匠様のお誕生の御跡であるなあ。南無阿弥陀仏。

ポイント注意

- 1小節め「ふたはたの」の「の」はタイ。
アクセントに注意。続いての「あまくだり」の「あ」は強声部ですから、弱くならないように。
- 最後は「捨てリン」(三拍目)
「しのあと」の「と」は感謝の心持ちで、ゆっくりそしてしっかり声を保って、捨てリンとなります。「リン」の音の止まるまで動かない。

第二番 法然寺の御詠歌 (高雲調)

松 濤 基 作曲

♩ = 88 ぐらい

mp *mf*

○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×

[詠頭] お ぼ - つ か - - な - [齊唱] た れ - か - - -

× ○ × ○ × ⊗ ⊗ × ○ ×

- - い - - い - け - - ん こ ま - つ - -

f

○ × ○ × ○ ○ ○ × ○ ×

- と - は こ ま - つ と は く も を

mf

○ × ○ × ○ × ○ × ⊗

さ - - さ - - う - - る た か -



第二番 讃岐の国 法然寺

おぼつかな ^{たれ}誰か言ひけん 小松とは 雲をささふる 高松の枝
 (法然上人御作)

建永2年(1207)法然上人75歳の時、お弟子の罪の責任を負うて四国御流罪の身となり、
 九条関白兼実公くじょうかんぱくかねざねこうのお計らいで、土佐の国に配流されるところを讃岐さぬきの国に留められて、小松こまつ
 の荘しょうという地にお着きになりました。その時のお寺の名を生福寺しょうふくじと言ひ、後年移転復興さ
 れたのが今の法然寺であります。この地に約9カ月滞留され、その間、善通寺など近在のお
 寺を巡礼されるとともに、人々を教化しお念仏の教えをひろめられました。

大意 お念仏の行を小松と言って無知な人だけを導く劣った行だとそしる人もいますが、と
 んでもないことです。お念仏の行は小松どころか、雲を支えんばかりに大きく枝を張った高
 い松のように、すべての善行にもまさる最も頼りとなる尊い勝れた行なのです。

ポイント注意

- 速度遅くならないように。
- 出だしの「おぼつかな」の「お」は、詠題のソ音からソミドと「ド」音をと
 り、そこから下へドシラの「ラ」音をおさえる。またはオクターブ下の「ソ」
 をとって、「ソラ」と一音上の「ラ」をとる。
- 一拍目休止、二拍目から出るところはソフトに。

第三番 十輪寺の御詠歌（深信調）

(ふるさとの御詠歌)

松 濤 基 作曲

松 濤 基 作曲

♩ = 44

p

○ × × ○ ○ × × ○ ○ × × ○ ○ × ×

[斉唱]

う ウ--- ま ア--- れ エ--- てーは

Musical notation for the first staff of the song. It features a treble clef, a key signature of one flat (B-flat), and a 7/8 time signature. The melody consists of eighth and quarter notes. Above the staff, there are dynamic markings: a hairpin (crescendo) followed by 'mf' (mezzo-forte) and a hairpin (decrescendo) followed by 'v' (piano). The lyrics 'まずーお もーいーで エーん ふ ウる さ ァーと' are written below the staff, with circles and crosses indicating the pitch contour.

○ × ○ × ○ × ○ × ○ × × ○ ○ × × ○
 まずーお もーいーで エーん ふ ウる さ ァーと

第三番 播磨の国 高砂 十輪寺

生まれては まづおもひ出ん 古里に ちぎりし友の 深き誠を
(法然上人御作)

法然上人が四国御流罪の道すがら、高砂の浦に立ち寄られて漁夫を教化^{きょうか}された霊跡であります。ご滞在はわずかの間でありましたが、村人に対して、仏の本願を信じて真心からお念仏すれば、いかなる罪もたちまちに消えて、必ず救われて行く喜びをさとされました。

大意 お念仏を唱えたならば、仏の本願の船に乘せられて、必ずお浄土に生まれることができます。もし私が先にお浄土へ生まれましたなら、この世でお念仏の喜びを共にし、お互いに浄土へ往生しましょうと契り合った懐かしい皆さん方の、深い真心をきっと思い出すことでありましょう。どうか皆さんもお念仏に励んで下さって、俱会^{くゑいっしょ}一処の喜びを分かち合いましょう。

ポイント注意

- 半拍休止で発声するところは、アクセントに注意して弱くならないよう。

第四番 如来院の御詠歌 (専念調)

♩ = 50ぐらい

松 濤 基 作曲

mf

○ × ○ × ○ × ○ × ⊗

[斉唱] みとくち と こころの ほかの み — —

⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ×

い — — だ — な れ — ば —

f

○ × ○ × ⊗ ⊗ ⊗ ×

わ れ を は な れ て と お — お な ぁ —

mp rit

× ○ × ○ × ○ × ⊗

え — こ そ す う う — れ —

第四番 摂津の国 如来院

身と口と 心のほかの 弥陀なれば われをはなれて 唱へこそすれ
(法然上人御作)

私たち凡夫は、身で行う事、口で言う事、心に思う事、ことごとく地獄行きの業^{ごう}であると教えられています。しかし、仏の救いは犯した罪の軽重にはかかわりなく、南無阿弥陀仏のお念仏の声を頼りに救いの御手を垂れ給うのであります。法然上人が四国ご流罪^{みぎり}の砌、神崎の辺りで遊女が救いを求めました。上人は仏の慈悲を説かれて、ただお念仏することをすすめられました。教えを信じた遊女は、喜びと安心とで自分の黒髪をおろし、間もなくお念仏の声と共に命を絶ちました。その遊女の黒髪が、今もこのお寺に保存されています。

大意 阿弥陀さまのお慈悲は、身と口と心で犯した罪を問わず救い給うのであります。ただ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、と唱えるお念仏の声のみが、救いの頼りであります。阿弥陀さまの本願力にすべてを頼み、お救いを信じてひたすら真剣にお念仏なさいませ。

ポイント注意

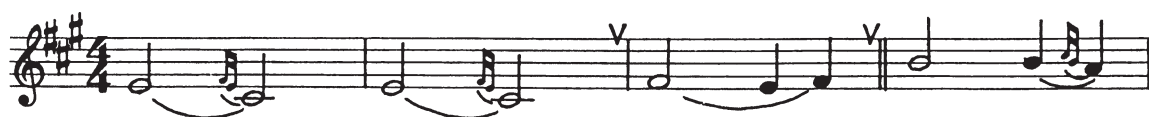
- 2拍子の曲。リズムを強調して歯切れよく。
- 「みだなれば」はのびやかに。
- 「われをはなれて」は力強く。

第五番 勝尾寺二階堂の御詠歌 (紫雲調)

(柴の戸の御詠歌)

♩=40

松 濤 基 作曲



〔詠頭〕 ○ × × ○ × × ○ × × 〔斉唱〕 ○ × ×
し — ば — の — — と オ —



○ × × ○ ○ × × ○ ○ × × ○ × ×
に あ け く れ か—か—る し —



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ○ ×
ら — — く ム も — を い つ む ら—



○ × ○ × ○ × × ○ × × ⊗ ×
さ き—の い ろ に み な さ— ん

第五番 摂津の国 勝尾寺二階堂

柴の戸に あけくれかゝる 白雲を いつ紫の 色に見なさん
(法然上人御作)

法然上人は讃岐の国の配所に約9カ月滞留された後、承元元年(1207)12月、ご赦免の宣が下りました。しかし、まだ京都に入ることには許されず、摂津の国^{かつおじ}勝尾寺の^{にかいどう}二階堂にお住まいになられました。ここは平安時代、勝如上人が長年無言の行をして浄土往生を願いましたが、夢で^{しやみ}沙弥教信のお告げにより、ひたすら念仏の行に励み、そして最期念仏往生された地です。このお念仏に御縁の深い草庵で法然上人79歳、建暦元年(1211)11月、帰洛の宣が下るまでの約4年間、毎日六万遍七万遍と^{ねんぶつざんまい}念仏三昧の日々を送られました。お年も召されたのでここを最後の地と思われ、このお歌を詠まれたのでしょう。

大意 勝尾の山の小さな草庵に、朝夕白雲が掛かっております。私の命が終わる時には、み仏様が必ず紫の雲に乗って、お迎えに来て下さることを信じております。そう思う時、あの白雲が紫の色になるのは何時の日でありましょうか。早くお迎えをいただきたいものであります。

ポイント注意

- 「あけくれ」の強弱のリズムを強調します。
- 最後の「いろに」の「ろ」に付してある符は洋楽の装飾音ではなく、和楽の特徴の発声で、そこが三拍目の強声の出となります。

第六番 四天王寺念仏堂の御詠歌 (至西調)

(うつせみの御詠歌)

三宅 勝 作曲
松 濤 基 編曲

♩ = 40



○ × × ○ × × ○ × ×
〔詠頭〕 あ — み — — — だ — — ぶ — と 〔斉唱〕 こ — — こ —



○ × × ○ × × ○ × ○ × ○ × ○ ×
ろ — は に し — — に う っ つ せ —



○ × × × × × × ○ × ×
み — の も ぬ け は — — — て た — — —



○ × × ○ × × ○ × ×
る — — こ — — — え — ぞ



第六番 摂津の国 四天王寺念仏堂

阿弥陀仏と 心は西に ^{うっせみ}空蟬の もぬけ^は果てたる 声ぞ涼しき

(法然上人御作)

法然上人53歳の時、四天王寺に詣でられて西門のそばの念仏堂にて、お念仏を唱えて日想観^{にっそうかん}を修せられました。そこへ高野^{こうや}の明遍僧都^{みょうへんそうず}がわざわざお越しになって、散り乱れた心で申すお念仏についてたずねられました。上人は、迷いの心を払ってお念仏しようと思うのは、生まれつきのままの目や鼻を取りはらいお念仏するに等しい事と仰せられて、凡夫のための念仏往生を説かれました。このお歌は、お念仏を唱えて浄土へまいる^{すがた}相を蟬の抜けがらにたとえて、念仏三昧^{ねんぶつざんまい}の境地をお示しになったお歌であります。

大意 西の方にまします阿弥陀さまをお慕い申して、浄土を願ひ一心にお念仏すれば、ちょうど蟬の抜け殻のように、何もかも忘れ果てて、苦しみや悩みから抜け出して、すがすがしい声でお念仏を喜ぶことができます。

ポイント注意

- 「こころは」の「こ」、「もぬけはて」の「は」、「こえぞ」の「こ」は、それぞれ小さな装飾音ですが、和楽ではこれが大切な声の立ち上がりです。しっかり声を出しましょう。

第七番 一心寺の御詠歌（専修調）

♩ = 40

松 濤 基 作曲



〔斉唱〕
あ み だ ぶ と ー い う よ り ー ほ か は つ の



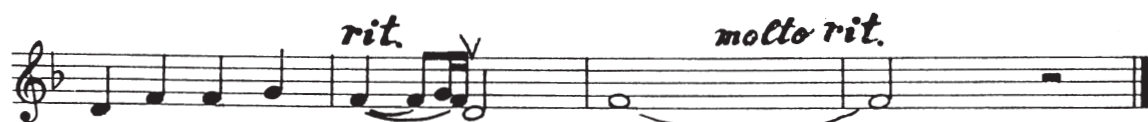
く ー に の ー な ァ ー ァ アン ァ



に い ー い ー わ の



こ オ ー オ ー と も



あ し か り ぬ ー ー ベ し ー

第七番 摂津の国 逢坂 一心寺

「極楽往生の行業には余の行をさしをきて

たゞ本願の念仏をつとむべしといふことを」

阿弥陀仏と いふよりほかは 津のくにの なにはのことも あしかりぬべし
(法然上人御作)

法然上人は四天王寺の西門の近くに四間四面の草庵を結び、「^{あらはか}荒陵^{しんべつしよ}の新別所」と名づけ、はるか難波の海を見下し、美しく輝く太陽が西に沈むのをご覧になり、西方極楽浄土に思いをよせ日想観^{にっそうかん}を修し、至心にお念仏をされたのであります。後白河法皇もここを訪れ、上人と共に日想観を修せられました。この草庵が、現在の一心寺の開創となったのであります。摂津の国難波の浦は葦の名所とされています。「なには」とは「何事」という意味にかけ、「あし」を「葦」と「悪し」とにかけ、巧みな表現でつづられています。

題意 極楽浄土へ往生するための行は、ただ阿弥陀さまが本願として誓われたお念仏の行だけで、その他の行は何もありません。^{せんじゆねんぶつ}専修念仏一行のお歌です。

大意 西方浄土へ思いを寄せる者は、ひたすらにお念仏の行だけに励みなさい。お念仏の行以外の行は、葦を刈るという言葉のように、往生のためには悪しき勤めとしてさしおきなさい。

ポイント注意

2拍子の曲です。

- 「あみ」が強声、「だぶ」が弱声です。
- 「いうより」の「り」のタイを大切に。
- 「こォーとも」の「こォ」の立ち上がりを大切に

第八番 報恩講寺の御詠歌 (報恩調)

曾 我 晃 也 作 曲

♩ = 54



[詠頭] ○○○○ ○ ○○ ○○○○ ○ ○○ ○ ○
 ご く ら く も — ご く ら く も — か く や あ る



○ ○ ○○○○ ○ ○ ○○○○ ○ ○○
 ら — ん あ ら た の し — は や ま い ら ば — — — や な



○ ○○○○ ○ ○○○○ ○ ○ ○○○○
 む あ — — み だ — ぶ — — ウ — つ —

第八番 紀伊の国 報恩講寺

極楽も かくやあるらん あらたのし はや参らばや 南無阿弥陀仏
(法然上人御作)

法然上人、讃岐の配所に着かれてから約9カ月の後、承元元年(1207)12月、御赦免の宣が下りました。この配所からお帰りの途中、暴風雨に遭って船は流され、紀州大川きしゅうおおかわに漂着しました。土地の豪族孫右衛門はじめ、村人一同が法然上人を心からお迎え申し、寒さと疲れを慰めました。村人たちは上人の慈眼温容を拝し、心から帰依きえして本願念仏の教えを蒙り、
「南無阿弥陀仏」と唱えるお念仏の声が、この地に高らかに弘まったのです。

(上人が讃岐へ配流のさい、塩飽島しわく たかはしやすとうにゅうどうさいにんの高階保遠入道西忍の館に着かれ温かいもてなしを受け、上人の教化により、島中がお念仏の声に包まれた時に詠まれた、と言われております。)

大意 皆さまの心からのおもてなしを受け、うれしい気持ちでいっぱいです。それにもまして皆さまの一心に唱えるお念仏の声が高らかに響いていることは、何よりもこの上ない喜びです。この様なお念仏の声が満ちあふれている極楽浄土へ、早くお参りしたいものです。南無阿弥陀仏。

ポイント注意 ● 6拍子の曲です。

- 6拍目の弱声から始まる「弱起」の曲です。したがって声の立ち上がりはソフトに。
- 左手は鈴をとらず、指をそろえて左もものつけ根に置きます。

第九番 當 麻 奥院の御詠歌（見浄調）

（往生院の御詠歌）

三 宅 勝 作曲



〔詠頭〕 ○ ○ × ○ ○ × ○ ○ × ○ × ○ ○ ×
あ み — — だ — ぶ — と — — 〔斉唱〕 も う す



○ × × ○ ○ × ○ × ○ ○ × ○
ば かり — を — — つと — め に て つと — め に



○ ○ × ○ × × ○ ○ × ○ ○ × ×
て — じょ う ど — の しょう ご — ん



○ × ○ × ○ ○ × ○ ○ × ⊗ ⊗
み る ぞ う れ — — し い — — き —

第九番 大和の国 當麻 奥院^{おくのいん}

阿弥陀仏と 申すばかりを つとめて 浄土の莊嚴^{しょうごん} 見るぞうれしき
(法然上人御作)

當麻寺の本堂は曼陀羅堂^{まんだらどう}と言ひ、中将姫の「當麻曼陀羅」^{たいままだら}が安置されています。この本堂の後方に奥院^{おくのいん}があります。この奥院^{おくのいん}は当初、往生院と呼ばれていました。南北朝時代、応安3年(1370)に知恩院第十二世誓阿上人が勅許を得て、動乱の京都より法然上人御影像^{ほうねんしょうにんぎよう}や法然上人行状絵図^{えず}(勅修御伝)など知恩院に収まっていた貴重な宝物をこのお寺に移されました。當麻寺の奥の院ではなく、知恩院の奥の院として開創されたのです。ある時、誓阿上人が夢で法然上人御影像の額に釘が打たれたと告げられ、驚いて目を覚まし釘を抜いたところ、血が流れ出ました。この靈驗を聞いて世の人は「血垂れの御影」と称して奉ったと記されています。

歌意 『九卷伝』には「三昧発得^{さんまいはつとく}の御歌には」とあり、法然上人も三昧発得の人であられたことを示しています。このことは上人御身の一大事でありますから、「われはただほとけにいつか」と願われたお歌と照らしてみれば、歓喜のお心のほども知ることができましょう。

大意 毎日お念仏を六万遍七万遍とひたすら励んでいますと、おのずから心が静かになり、目のあたりに阿弥陀さまやお浄土のありさまを拝むことができます。身も心も喜びにひたることができますのは、本当にありがたいことです。

ポイント注意

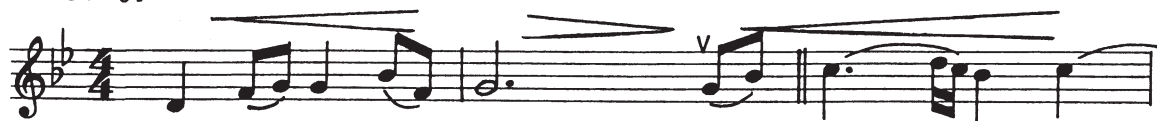
- 半拍休止から立ち上がる声はかるくアクセントをつける。
- 「みるぞ」の「みる」はソフトに、「ぞ」で力強く。

第十番 香久山法然寺の御詠歌（樂邦調）

（かぐ山の御詠歌）

松 濤 基 作曲

♩ = 54



〔詠頭〕 × × × × 〔斉唱〕 × ×
 ご く ら くー へ つー と ー め て



× × ○ × ○ × ○ × × ○ ○ × ×
 ー は やー く いー で ー た ー た ー ば ー み の お わ り ー



○ × × ○ × ○ × ○ × × ○ × ⊗ ×
 に ー は まー い ー り ー つ ー きー な ん

第十番 大和の国 香久山 法然寺

極楽へ つとめて早く 出で立たば 身の終り^{をわ}には 参りつきなん
(法然上人御作)

元久2年(1205)3月、法然上人73歳の時、高野山へ参詣された帰途、聖徳太子生誕の地である橘寺へ巡拝され、この地の小庵(少林院)に逗留され、有縁の人々を教化された旧跡であります。大永8年(1528)、知恩院第二十六世保誉源派上人が夢で法然上人より「香久山や ふもとの寺は せまけれど 高きみ法^{のり}を ときて弘^{ひろ}めむ」というお歌を賜り、寺号を法然寺と改め、専修念仏を行じて人々を教化されました。御本尊の阿弥陀如来は御足と蓮台との間に隙間があることから、「浮き足如来」と尊称されています。

大意 極楽は西方十万億土のはるか彼方と説かれています。しかし、旅が朝早く出立するのが習いとなっているように、極楽浄土への旅立ちも早く発心してお念仏に励みましたら、命終わるとき阿弥陀さまのお迎えをうけ、必ずお浄土に参りつけるのです。年が老いるのを待って初めて道を学ぼうなどと思ってはなりません。今から直ちにお念仏の信仰の道に励みなさい。

ポイント注意

- 「みのおわり」は、「美濃・尾張。身の終り」と聞こえるように言葉を句切りましょう。

第十一番 東大寺指図堂の御詠歌 (円光調)

(春の御詠歌)

♩=53

松 濤 基 作曲



〔詠頭〕 ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
さ — え — ら — れ — ん — ひ — か —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
り — も — あ — る — を — お — し — な —



○ ⊗ ⊗ ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
べ — て — へ — だ — て — が — お — な —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ⊗ ⊗ ×
る — あ — さ — が — す — み — か — な —

第十一番 大和の国 東大寺指図堂

さへられぬ 光もあるを おしなべて 隔^{へだ}て顔^{がほ}なる 朝^{あさ}霞^{がすみ}かな
(法然上人御作)

治承4年(1180)、平重衡^{たいらのしげひら}により東大寺や興福寺など南都の町々が焼き打ちに合い、人々の心の動揺は計り知れないものがありました。後白河法皇^{ごしらかわほうおう}は、一刻も早く東大寺を再建したいと願われて、翌年東大寺造営の勸進職^{かんじんしよく}を法然上人に内命されたのです。しかし、上人は名利^{みょうり}を厭^{いと}い専修念仏の身であるとしてこれを辞退され、お弟子の俊乗坊重源上人^{しゅんじょうぼうちゅうげん}を推挙されました。指図堂^{さしずどう}は、勸進職となった重源上人が再建工事の指図^{さしず}をなされた普請場の跡で、法然上人も陰の力となって手助けなされたのです。その後建久2年(1191)の頃、この東大寺で多くの学僧を前に浄土三部経を講説されたのであります。指図堂の御影^{みえい}は、墨染の衣に金剛草履^{こんごうぞうり}をはいて勸進されている法然上人の珍しいお姿であります。

大意 阿弥陀さまのすべての人を隔^{へだ}てなく救い取ろうとされるお慈悲の御光は、さえぎろうとしてもさえぎることができません。しかし、朝霞が春の光を一樣に隔てるように、疑い迷う心がお慈悲の光を隔ててしまいます。阿弥陀さまは、たとえ疑い迷う心を持ってもお念仏する人を照らし、救い取ってくださいます。なんとありがたい教えではありませんか。

ポイント注意

- 「ひかりもー」「へだてがー」の「ー」の音程、半音低くならないように。

第十二番 欣浄寺の御詠歌 (神影調)

松 濤 基 作曲

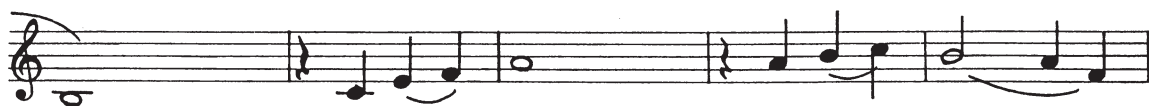
♩ = 63 ぐらい



○ × ○ × ○ × ○ ×
 [詠頭] や わ — ら — ぐ る [斉唱] か み — の — ォ —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
 ひ — — — か — — り の か げ — み — ち —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
 て あ き — に か わ — ら — —



○ × ○ × ○ × ⊗ ⊗
 ぬ み — — じ — — — か よ — の —



第十二番 伊勢の国 欣浄寺

和らぐる 神の光の 影みちて 秋にかはらぬ 短か夜の月
(法然上人御作)

承安5年(1175)、法然上人が43歳で浄土宗を開かれた時、伊勢神宮に参籠して念仏弘通をお祈りになりました。その時、日輪が現われてその中に六字の名号が光を放ちましたので、念仏が神慮に叶ったものと受け止められ、その証として、自ら感見された相を写し取って外宮に納められました。これが「日輪の名号」と呼ばれております。その後外宮が兵火に会い、日輪の名号は焔の中から舞い上がって笹の葉にかかり光を放ったと言われ、笹の葉名号と尊称されるようになりました。

大意 阿弥陀さまはじめ、仏・菩薩のお慈悲は何としても人々を救いたいと、煩惱の塵の世に身を変えて現れ、神の姿となって私たちを守り導き、お念仏を勧めておられます。今、その神の御威光が満ち満ちています。夏の夜ではありますが、月は秋のようにこうこうと照り輝き、その月の光の中で、神の御威光、すなわち阿弥陀さまのお慈悲の光を身と心でいただき、夜の更けるのも忘れて一生懸命お念仏を申し続けました。

ポイント注意

- 一拍目休止符で、二拍目からの立ち上がりとし四拍目はソフトに。

第十三番 清水阿弥陀堂の御詠歌 (十念調)

(きよみずの御詠歌)

♩=40

松 濤 基 編曲



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
 [詠頭] あみ だ ぶーと ----- [斉唱] とこ ぉーえ となーえ ーて



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
 まどーろ まー ん ----- なー が き ねむーりーと



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ○ × ×
 な-り もこ-そす れな ー ャムあ ---- みー



○ × × × × × ○ × × ○ × ×
 だ ャー ----- ぶ ----- つ -----



○ × × ○ × ○ × ○ ○ × × ○
 — — — な — む — — あ — — み



× × ○ × × ○ × × × ⊗ ×
 い — — だ — — — — ぶ — — — — つ —

第十三番 山城の国 清水阿弥陀堂

「睡眠の時十念を唱ふべしといふ事を」

阿弥陀仏と 十^{とこえ}声^{こえ}唱えて まどろまん 長^{ねふり}き眠^ねと なりもこそすれ
 (法然上人御作)

清水寺の本堂より奥の院へ行く手前に阿弥陀堂があります。法然上人は清水寺で円頓戒を説かれ、次にお念仏の教えをねんごろに勧められたのです。清水寺の沙弥印蔵はこの教えを聞き、深く阿弥陀さまの御本願を信じ、ひたすらお念仏の教えに帰依されることとなりました。そして文治4年(1188)、阿弥陀堂(瀧山寺と呼ばれていた)を道場として不断念仏三昧を始められました。恵心僧都御作の阿弥陀如来像が安置され、後柏原天皇(1464～1526)の「日本最初常行念仏道場」の勅額が掲げられています。

題意 夜やすむ時、必ずお十念を唱えなさい。

大意 老少不定は世の習いです。何時どこでどんな事が起こってもあわてないように、平素からお念仏に励みましょう。そして夜眠る前には必ず、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と十遍のお念仏をして眠りにつきましょう。たとえそのまま長い眠りになっても、悔いのないように致しましょう。これはお念仏を信じる人達のたしなみであります。

ポイント注意

- 半拍休止からの声の立ち上がりはアクセント強めに。
- 息つきは弱声部をいかして。

第十四番 小松谷正林寺の御詠歌（千歳調）

(小松谷の御詠歌)

松 濤 基 作曲

$\text{♩} = 60$

○ × × ○ ○ × × ○ ○ × × ○
〔斉唱〕
ち とせふ る こまつのも とを す ーみ か

○ × × ○ ○ × ○ × ○ × ○ × × ○
に 一て む りようじぶつ_{ぶつ}の む 一—かえ— エ 一—

The final staff of music shows a deceleration (rit.) leading to a double bar line. The notation includes a half note, a quarter note, and a half note, all marked with a deceleration hairpin.

○ × × ○ ○ × ○ × ○ × × ○ ⊗ ⊗
を ぞ ま ー ー つ

第十四番 山城の国 小松谷 正林寺

ち
千とせふる 小松のもとを すみかにて 無量寿仏の 迎へをぞ待つ
(法然上人御作)

小松谷正林寺は、信仰心の篤い平重盛たいらのしげもりの小松殿と言われる別邸でしたが、後に九条くじょう関白兼実公かんぱくかねざねこうの山荘となりました。法然上人は兼実公が上人のために建てられた小松谷の別邸での生活を大変喜ばれ、ご高齢でもありましたのでこの地を終焉しゅうえんの地と思い、お歌いになったものであります。

大意 千年もの長い年月を経た老松がそびえている小松谷の地に住まいしております。年を重ねていますので、ここを最期の地だと思い、お念仏を唱えながら、命限りない無量寿と呼ぶ阿弥陀ほとけのお迎えをお待ちいたしましょう。

ポイント注意

- 4拍子のリズムを強調します。
- 「むりょうじゅぶつの」は、歯切れよく、「むかええー」以下はのびやかに。
- 最後の鈴鉦同時打ちはゆっくり。

第十五番 源空寺の御詠歌（上蓮調）

曾 我 晃 也 作曲

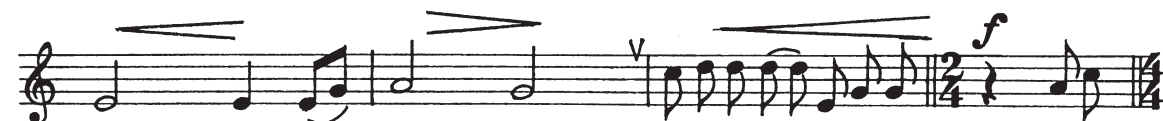
♩ = 54



〔詠頭〕 ○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
ひ — と — — — 〔斉唱〕 こ — え — も — — ぁ — — なむ



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
あ み だ — ぶ と い う — ひ と — の — — はち



○ × × ○ × ○ × ○ × ○ × ⊗
す — の う — え — に はちすの — う え に のぼ



⊗ ⊗ ⊗ ○ × ○ × ○ × ×
ら — — ぬ — — は な し

第十五番 山城の国 伏見 源空寺

ひとこゑ
一声も 南無阿弥陀仏と 言ふ人の はちすの上に ^{のぼ}上らぬはなし
(空也上人御作)

このお寺は昔、木幡の里（現在の宇治市内）にあり、三井寺の忍空上人が法然上人の徳風を慕い専修念仏されておられました。建久6年（1195）法然上人63歳の時、東大寺落慶法要の帰途、忍空上人の請いによりこの地に立ち寄られ、多くの人々を教化された所です。村人は別れを惜しんで、上人の御影を安置することを願い、上人は自ら写されたお経の紙を使い、自らの像を作り忍空上人に授与されました。これが「張貫^{はりぬき}の御影^{みえい}」で、この法然上人像を本尊として、慶長17年（1612）現在の地に移され、宝海山・法然院・源空寺と呼び定められました。

このお歌は、『拾遺和歌集』に「市門^{いちのもん}に書き付けて侍ける」と題して空也上人御作として記載されています。（ただし、初句は「ひとたびも」）

大意 阿弥陀さまの本願を深く信じ、心からお念仏を申したならば、たとえそれが一声であつても、必ず阿弥陀さまの御手によりお浄土の蓮の^{うてな}台に上らせていただけるのです。

ポイント注意

- 「弱起」の曲です。声の立ち上がりソフトに。
- 「はちすのうえに」は歯切れよく。

第十六番 光明寺の御詠歌 (一蓮調)

(花のうてなの御詠歌)

♩ = 40

三宅 勝 作曲

p



〔詠頭〕 × × ○ × ○ × × ○ × ×
つ — — ゆ — の — み — は こ — — こ

mp



○ × × ○ × ○ × × ○ × ×
かしこにて き — — え ぬ — と — — — も —

mf *p*



○ ○ × ○ × × × ○ × ×
こ — ころ — は お — — な — じ — —

rit. *p*



○ × × ○ × ○ ○ ×
は — な の う — — て — な そ

第十六番 山城の国 粟生 光明寺

露の身は ここかしこにて 消えぬとも 心は同じ 花のうてなぞ
(法然上人御作)

光明寺は西山浄土宗の総本山であり、「浄土門根本之地」と称されています。承安5年(1175)法然上人43歳の時、浄土宗をお開きになり、元黒谷の報恩蔵をあとにして、浄土開宗の第一声を揚げられた故地であります。後に法力坊蓮生(熊谷直実)が、この地に一字を創建し、御師法然上人を請じて開山の祖師と仰がれました。上人はこの静寂の地を愛し給うて、念仏三昧院と名づけられました。尚この地は、法然上人滅後16年目に、ここで御遺骸を茶毘に付した霊地でもあります。

《お歌の背景》 このお歌は、法然上人が讃岐へ御流罪になられる時、今生の別れに際し九条関白兼実公が「ふりすてて 行くは別れの はしなれど ふみわたすべき ことをしぞ思ふ」と詠まれたお歌に対する返歌です。この1カ月後、兼実公は58歳で往生されました。建永2年(1207)3月、上人75歳の時のことです。

大意 名ごりは尽きませんが、おくれ先立つは世の習いです。草葉の露のようにはかない私たちの命です。お互いの身が都で果てようともどこで果てようとも、共に極楽浄土の蓮の台でお会いしようという思いにかわりはありません。

ポイント注意

- 終り4小節の表情に心をこめます。

第十七番 二尊院の御詠歌（誓願調）

松 濤 基 作曲

♩ = 40 ~ 50



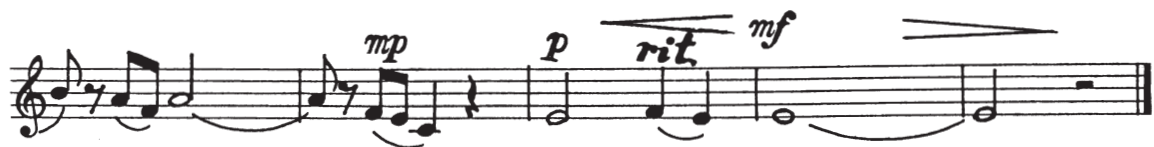
○ × × ○ × × ○ × × × ○ × ○ ×
 〔詠頭〕 あし — い — — — び い — き — — — の — ぁ やま — どり —



○ × × ○ × × × ○ × × ○ × ×
 の ぁ — お — の — し だ — り お — の な が な が —



○ × × ○ × × × ○ × × × ○ × ○ ×
 し — — — よ — を い の — る



⊗ × ⊗ × ○ × × ○ × ×
 — こ — の — ぁ — — て ェ — ら —

第十七番 山城の国 嵯峨 二尊院

あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の 永々し世を いのるこの寺
(摂政二条康道作)

二尊院は、法然上人がお念仏の道場とされ、その後お弟子の湛空上人が再興されたお寺で、法然上人滅後16年目に、粟生の光明寺で御遺骸が荼毘だびされる前に一時安置され、また茶毘ちびのち分骨された霊地であります。お釈迦さまはお念仏をしてこの世からお浄土へ往生することを勧められ、阿弥陀さまはお浄土から私たちを導いてくださいます。この釈迦・弥陀の二尊がおまつりされていることにより、二尊院と呼ばれています。ここには法然上人の代表的な肖像の『足曳あしびきの御影みえい』がまつられています。九条関白兼実公くじょうかんぱくかねざねこうが絵師たかま ほうげんの琢磨法眼に命じ、上人ゆあみが沐浴されたあと、足を伸ばして休んでおられるところをこっそりと写しました。後日、上人がご覧になり驚いて祈念されると、たちまち投げ出した足が引き込まれたといわれています。

二条昭実公は徳川家康、将軍秀忠公と三名連署して「禁中並びに公家諸法度」を制定し、再度の関白を五年間努め、病を得て辞任された日、元和5年(1619)7月14日に没しました。摂政二条康道公は、父昭実公が葬られた二尊院に詣で、その縁起に感激されました。戦乱に明け暮れた戦国時代から、殺し殺され、天災地変が打ち続く災難に人々は苦しみ続け、ようやく太平の世がおとずれました。康道公は、二尊にひたすら祈り、お慈悲を願って、とっさに柿本人麻呂の歌に託して、この歌を読まれたといわれています。

大意 どうぞ戦乱動乱天災なき清き平和な世の中が永く続きますよう、御守りください。

南無阿弥陀仏

ポイント注意

- 「あし・びィ・やま・どり・のォ」はシンコペーション、声の立ち上がりをソフトに、また三拍目はかるくアクセント。

第十八番 月輪寺の御詠歌 (月影調)

(月かげの御詠歌)

松 濤 基 編曲



[斉唱] × × ○ × × × × ○ × ×
つ き か げ の い た ら ぬ さ と は



× × ○ × ○ ○ × × ○ ○ × ×
な け れ ど も な が む る ひ と の



○ × ○ × ○ × × × × ○ ×
こ こ ろ に ぞ ー す ー む ー

第十八番 山城の国 愛宕 月輪寺

「光明徧照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨のころを」

月かげの いたらぬ里は なけれども ながむる人の 心にぞすむ
(法然上人御作)

このお寺は、天応元年（781）慶俊僧都が中興され、その後空也上人も修行された霊地です。慶俊僧都が地中より鏡を掘り出すと、その裏に「月輪照臨」の詞が記されており、それにちなんで月輪寺と命名したと伝えられています。月輪殿は法然上人に私淑された九条関白兼実公がお作りになった山荘で、二十五霊場を定められた霊沢上人の『案内記』には、「都の辺りには月の輪という所が三ヶ所ある。東福寺北の旧地は元祖大師の頭光踏蓮の奇瑞を示された橋の池など、今は跡が絶えて所がわからない。月の輪の御旧跡はここに決つしたいが、今は仮に愛宕の月の輪を二十五番の内に入れて額をかけた。」と記されています。「念仏の声する所みな我が遺跡」と諭された法然上人のお言葉を、よくよく味わいたいものです。このお歌は浄土宗の宗歌となっています。

題意 阿弥陀さまのお慈悲の光はすべての世界を照らし、お念仏する人をすべて救いとり、決して見捨てはなさいません。

大意 月の光は、山にも里にも隈無く照らしていますが、ただこれを眺める人だけに美しく澄んだ月を賞でることができます。同じように、阿弥陀さまのすべての人を救おうとされるお慈悲の光は、阿弥陀さまの御心をいただいてお念仏を申す人のみに宿り住し澄みわたるのであります。しっかりお念仏に励みなさい。

ポイント注意

- 「つきかげの」の「の」、「なけれども」の「も」、「ひとの」の「の」、「すーむ」の「む」、いずれもしっかり声を保ちます。

第十九番 京都法然寺の御詠歌（唯念調）

♩ = 60~70

曾我晃也 作曲



○ × × ○ × × ○ × ○ × ○ × ×

〔詠頭〕

ただ た ——— の ォ ——— め



○ × × ○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×

〔斉唱〕

よろずの 一つみ い — — は — — ふか



○ × ○ × ○ × × ○ × × ○ × ×

く と — も

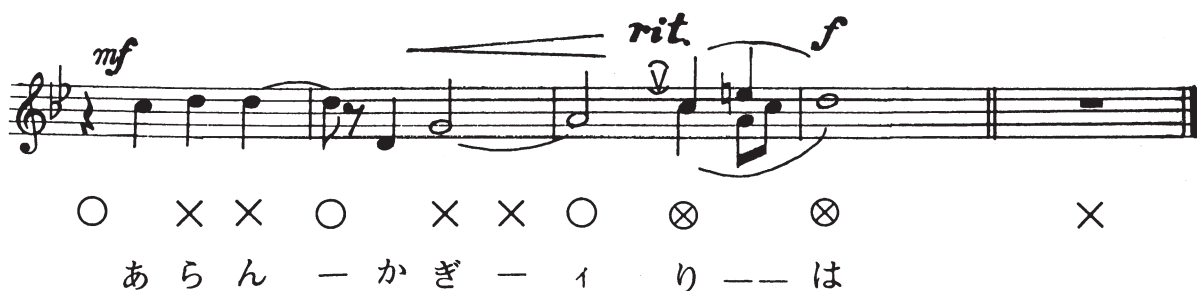
わがほ ん — が ん の



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ○ ×

— わ が — — ほ

ん — — が ん — — の —



第十九番 山城の国 嵯峨 法然寺

ただ頼め よろずの罪は 深くとも わが本願の あらん限りは
(真如堂の如来より授けられた歌)

法然上人の弟子となり^{ほうりきぼうれんせい}法力坊蓮生と名のつた坂東武者の^{ばんどう むしや}熊谷直実が故郷の熊谷へ帰る時、上人の御影を懇望したところ、上人自ら御影像を^{れんせいぼう}刻み蓮生坊に与えられました。故郷熊谷にこの尊像をご供養された後、霊告により再び京都に護持され、父君の旧館跡に一寺を建立し、法然上人を開山と仰ぎ、法然寺と号してこの尊像を安置されたのであります。^{れんせいぼう}蓮生坊は信仰心の厚い方でしたが性格は気が強く、^{せいかんぼうげん ちしゅうにん}勢観房源智上人が法然上人より授かった金色の名号を無理に取り上げてしまわれました。法然上人は墨のままの名号を書かれ、上人が^{しんにょうどう}真如堂の阿弥陀さまより授けられた、というこの歌を書き添えて、^{れんせいぼう}蓮生坊にすぐに返すようにと諭されたのであります。これが世に伝えている「熊谷の横取りの名号」です。

大意 ただ一心にひたすら私（阿弥陀如来）に救われたいと頼みなさい。どんなに罪深い人でも、私の救いを心から信じ、私の浄土へ生まれたいと願い、頼む心さえあればいいのです。私のこの本願がはたらき続ける限り、ひたすらお念仏を唱え、私に救われたいと頼みなさい。

ポイント注意

- 「ただー」はシンコペーション、「た」をおさえ、「だー」にアクセント。
- 「よろず」「ふかく」「わがー」「がん」、いずれも立ち上がりソフトに。
- 「かぎりは」の「は」は声を強く保って「捨てリン」（三拍目）となります。
「捨てリン」の響きが止まるまでは動かない。

第二十番 誓願寺の御詠歌 (到浄調)

松 濤 基 作曲

♩ = 40~50

mp *mf*

○ × ○ × ⊗ × × ○ × ○ × ⊗ × ×

〔詠頭〕 げ — — く ウ— 〔斉唱〕 ら — — く ウ— —

mf

○ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ×

は は — — る — — — け — — き

mp

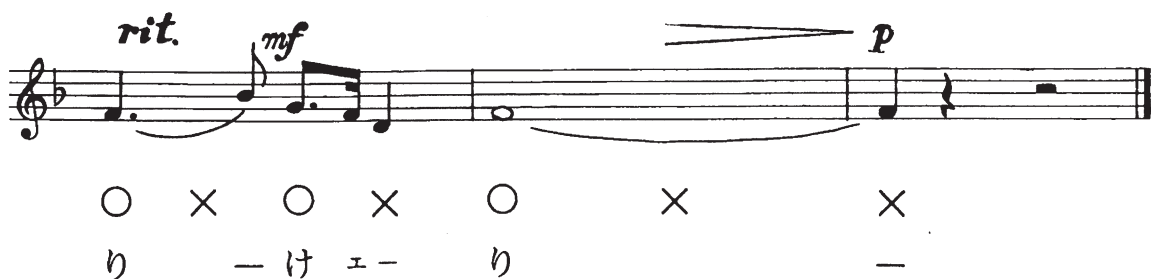
○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ○ × ×

ほォ — ど と き き— し か— ど つ と め て

f

○ ○ × × ○ × ○ × ⊗ ○ × ○ ⊗ ⊗

い た— る と こ —ォ — — — ゾろ — — オ な



第二十番 山城の国 京極 誓願寺

極楽は はるけきほどと 聞きしかど つとめて至る 所なりけり
(伝) 空也上人御作)

誓願寺は浄土宗西山深草派の総本山です。保元元年（1156）法然上人24歳の時、嵯峨の清涼寺での7日間の参籠を終え、南都へ赴かれました。そこで法相宗の蔵俊僧都と法談され、この時53歳の僧都は上人の智慧の深いことに感嘆し、直ちに弟子となる礼をつくされたのです。僧都は誓願寺の第21世でしたが、お念仏に帰依され浄土宗とし、上人を第22世中興開山と仰がれました。このお歌は空也上人（903～972）御作と伝えられています。

大意 私にとって極楽は、十万億土のはるか彼方で、往生できるような修行も善根功德も積めない、手の届かない存在と教えられていました。しかし、そうではないのです。早く発心し今からお念仏に励みましたならば、阿弥陀さまの本願力で誰でも即座に往生できる所なのです。

ポイント注意

- 「ごーくうー」の「く」は力強く短く止め、「うー」と軽くうける。
- 「ほーどと」の「ほ」を押さえて、「おー」にアクセント。
- 「つとめて」のリズムを強調します。

第二十一番 勝林院の御詠歌（明照調）

（秋の御詠歌）

松 濤 基 作曲

♩ = 53



〔詠頭〕 ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
あ — み — — だ — ぶ — — — に — —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
そ — — む — — — る — — こ — こ — ろ — — の い — —



○ × ○ × ○ ⊗ ⊗ ○ × ○ ×
ろ — — に — — い — — で ば あ — — き — —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
の — — こ — — ず — — え — — の — — た — —



第二十一番 山城の国 大原 勝林院

阿弥陀仏に 染むる心の 色に出でば 秋の梢の たぐひならまし
(法然上人御作)

勝林院は、文治2年(1186)秋、法然上人54歳の時、天台の大学者^{けんしんほういん}顕真法印の要請によって、南都北嶺の多数の名僧学匠に対し、お念仏の法門について談義された「大原問答」^{おおはらもんどう}のあったお寺です。一日一夜の談義の後、^{けんしんほういん}顕真法印は上人の教えに感嘆し、自ら先頭に立って多くの僧とともに三日三夜念仏行道され、その声は山谷に満ち林野に響き渡ったと言われます。法然上人の教えが広く伝わる契機となり、浄土宗にとって因縁の深い聖地であります。

大意 阿弥陀さまの本願を深く信じ頼む心は、常々にお護り・お育てを蒙り^{こうむ}、その御心が深く染み入り、日を追うごとに私たちのお念仏の暮らしに現れてきます。秋の深まりにより、一段と燃え立つような深い紅の色に染められていく梢のようです。

ポイント注意

- 息つぎに特に注意します。

第二十二番 大本山百萬遍知恩寺の御詠歌 (葵調)

(夏の御詠歌)

♩ = 50

松 濤 基 作曲



[齊唱] ○○× ○○× ○○× ○○× ○○×
われはた だ ほとけに い つか あ — — —



○○× ○ × ○ × ○○× ○○× ○ ×
お — い ぐ — — さ こころの つ まに か — —



☒ ○○× ○○× ○ × ☒ ☒
け ぬ — ひ — ぞ — な — — — き

第二十二番 山城の国 大本山百萬遍知恩寺

われはただ 仏にいつか 葵草^{あふひぐさ} 心のつまに 掛けぬ日ぞなき

(法然上人御作)

法然上人が一時住まわれた賀茂^{かも}の河原屋^{かわらや}という寺堂に、お弟子の勢観^{せいかん}房源^{ぼうげん}智^ち上人が御影堂を建てられたのが、このお寺の起こりであります。後醍醐^{ごだいご}天皇の御代、京都に大地震があり、更に悪疫が流行しました。天皇は大変心配なされて、知恩寺の第8世空円^{くうえん}上人に、悪疫退散の祈願を命ぜられました。上人は衆僧を集めて、百万遍のお念仏を修せられたところ、悪疫は次第に治まり、人心も落ち着いてまいりました。その功により、「百万遍」という勅額を賜り、その後「百万遍」の通称で親しまれています。「葵草^{あふひぐさ}」というのは、二葉葵^{ふたばあおい}の別名です。京都の葵祭^{あおい}はこの草を掛けて行うので「掛葵^{かけあおい}」の名があります。み仏に心を掛けることを「掛葵」でお歌いになられました。

大意 私は何時もみ仏にお会いし奉り、何時も心に掛けて、片時も、み仏と離れた事はありません。

ポイント注意

- 2拍子のリズムを強調して唱えます。
- 「あおいぐさ」はのびやかに。
- 「かけ」の「け」を力強く、「ひぞなき」はのびやかに、次第にゆっくり。

第二十三番 大本山清浄華院の御詠歌 (清浄調)

(冬の御詠歌)

松 濤 基 作曲

♩ = 40



〔詠頭〕 × ○ × ○ × ○ × ○ ×
ゆ ー き ー ー の ー (斉唱) う ち に



○ × ○ × ○ × ○ ○ × ×
ほ と ー け の み ー ー ー ー な を と な う れ



○ ○ × × ○ × ○ × ○ × ×
ば つ ー も れ ー る つ み ぞ



○ × × ○ × × × ○ ×
や ー ー が て ー き ー え ー ぬ ー ー る

第二十三番 山城の国 大本山清浄華院

雪のうちに 仏のみ名を 唱ふれば つもれる罪ぞ やがて消えぬる
(法然上人御作)

このお寺は、清和天皇の勅願により貞観2年(860)、慈覚大師円仁じかくだいしえんにんにより創建され「清浄な華の台の如し」という意味から清浄華院しやうじやうけいんの名を賜りました。法然上人のお念仏の教えは、道俗・貴賤を問わずあらゆる人々から帰依されました。上人は、高倉天皇・後白河法皇・後鳥羽天皇の三帝に授戒された功により、このお寺を賜われたのであります。これは、罪を雪しやうにたとえて称名滅罪しょうめつざいの徳よを詠まれたお歌です。

大意 雪が降り積もるように、私たちの身にも日々に知って作った罪、知らずに作った罪が積もってゆきます。しかし、あるがままの姿で、身と口と心で作り積もった罪を心から懺悔さんげし阿弥陀さまの御名を唱えたならば、阿弥陀さまのお慈悲の光に照らされ、すべての徳が包み込まれたお名号の功德により、罪はたちどころに消えてしまうのです。

ポイント注意

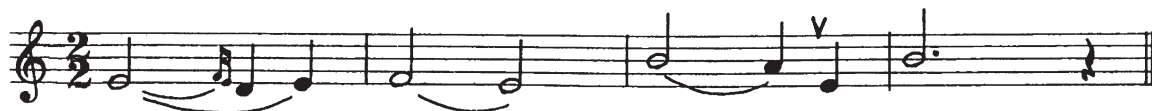
- 第1小節目の鈴鉦のテンポは、詠題やお唱えと同じテンポで。

第二十四番 大本山金戒光明寺の御詠歌 (摂心調)

(池の水の御詠歌)

$\text{♩} = 40$

松 濤 基 作曲



○ × ○ × ○ × ○ ×
〔詠頭〕 い — — け ェ の — み ず



○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
〔齊唱〕 ひ — と の こ — — こ — ろ ぉ —



○ × ○ × × ○ × ×
に — にたりけり — — にたりけり



○ × × × ○ × × ×
に — — ご り す む — こ と —



第二十四番 山城の国 大本山金戒光明寺

池の水 人の心に 似たりけり 濁り澄むこと 定めなければ
(法然上人御作)

法然上人は浄土開宗の後、比叡山の黒谷の別所を降り白川の禅房に住まいされました。上人の師の叡空上人よりゆずり受けられ、教化の道場とされた所であります。後、黒谷別所を移したので、新黒谷ともいいます。後年、寺観が整い金戒光明寺と呼ばれました。ここには法然上人の御真筆の『一枚起請文』が残されています。

大意 庭の池の水をつくづく眺めていると、時には澄み、時には濁っています。人の心もそれに似ていて、信仰の喜びに包まれているかと思えば、次の瞬間には煩惱の心がわきおこってきます。何とも心もとないことですが、このような私であればこそ、ただ阿弥陀さまの本願力を頼み、お念仏申しましょう。

ポイント注意

- 2拍子。したがって「い」が強声、「一一」が弱声。
- 「にたりけり」の「にた」の強声を強調します。

第二十五番 総本山知恩院の御詠歌（本願調）

（弥陀本願の御詠歌）

♩ = 53

松 濤 基 編曲



〔詠頭〕 × ○ × ○ × ○ × ×
く — — さ — — — も — — — き — — —



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
も — — — — か — れ た る の — べ に



○ × ○ × ○ × ○ × ×
た — だ — ひ — と — り — — ま — つ の — み —



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
の — — こ る — み — — だ — — — — の — ぉ —



第二十五番 山城の国 総本山知恩院

草も木も 枯れたる野辺に ただひとり 松のみ残る 弥陀の本願
(観智国師御作)

浄土宗開創の念仏の根本道場であり、法然上人の御真骨を安置した御廟所のある浄土宗七千余ヵ寺の総本山であります。華頂山知恩教院大谷寺かちうざん ち おんきういん おおたにでらと言うのが正しい名称であります。法然上人は43歳の御時、承安5年(1175)3月14日、南無阿弥陀仏と唱えるお念仏の声により、弥陀の本願に乗じて必ず浄土に往生することを得る、という浄土の法門を開かれました。末法万年の後すべての経文は滅んでも、お念仏の教えだけは後々までも生き続け、ひたすら衆生を救う力を増すと教えられています。観智国師(1544～1620)は、増上寺の第12世で源誓存応慈昌上人といい、徳川家康公の帰依を受け、法然上人の徳を慕い、総本山知恩院の興隆と近世浄土宗発展の基礎を築かれた高僧です。

大意 冬の木枯らしの吹きすさぶなか、すべての草木が枯れてしまった野辺に、松だけが常磐とときわの緑をきわだたせているように、すべての教えがすたれてしまっても、弥陀の本願の御教えだけは何時いつまでも、私たちを護り導かれるのであります。

ポイント注意

- 「くさもき」などの各音の立ち上がりは洋楽の装飾音風でなく、しっかりと力を込めて。
- また、「かれたる」の「か」、「ただひとり」の「た」の音程に注意。

室津 浄運寺の御詠歌 (欣求調)

(かりそめの御詠歌)

松 濤 基 作曲

♩ = 40~44



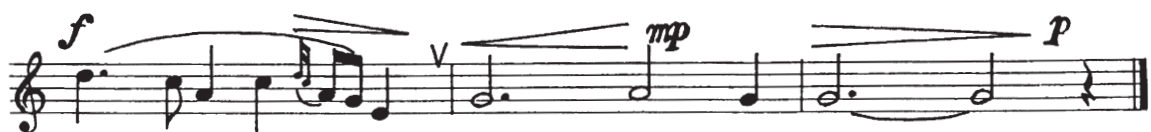
〔詠頭〕 ○× ○× ○× ○× ○× ○× ○× ○×
か り そめの 〔斉唱〕 いろのゆ かり —の



○× ○× ○× ○×× ○×× □ ○× ○×
ゆ かり — の こい—に い—だ に



○ × × ○ × × ○ × × ○ × × ○ × ○ ×
あ—う には— み を— も お —



○ × × □ ○ × ○ × ○ × × ⊗
し — — い—み や は す る —

播磨の国 室津 浄運寺

「仏法に逢ふて身^{しん}命^{みょう}を捨つといへることを」

かりそめの 色のゆかりの 恋にだに あふには身をも をしみやはする
(法然上人御作)

室津では遊女友君の求めに応じて、法然上人は「命をかける程道心はおこらなくても、ただそのままでよい。念仏しなさい。阿弥陀様は貴方のような罪深い人の為に誓願をたてられたのです。ただその本願を信じて頼み、あえて自分の身を卑下しないように」と優しく懇ろに教え導かれました。遊女友君は、その後信心堅固にして、臨終正念高声念仏し往生を遂げられました。四国帰りの上人は、遊女友君の往生の様を聞かれ、「しつらん しつらん」と感激されました。

題意 この人生で、仏の御^み教^{おし}えに遇う事ができました。このご縁の尊さに目覚め命がけで仏の御^み教^{おし}えを実行してください。

大意 一時の人生の恋愛でさえ、恋しい人と契るためには、命も決して惜しみません。まして私を、この世後の世、共に必ず護り導き救いたまう阿弥陀仏に対しては、心から信じ、お慕い申し上げ、恋いこがれる思いで称名念仏し、死生共にわずらいなき歓びを得、往生を願い求めましょう。

ポイント注意 ● 6拍子の曲です。

● 「かりそめの」の「の」の装飾音は四拍目の強声です。

至誠心の御詠歌（至誠調）

$\text{♩} = 40 \sim 50$

松 濤 基 作曲

$\text{♩} = 40 \sim 50$

松 濤 基 作曲

The musical score is written on a single staff in treble clef with a key signature of one flat (B-flat) and a time signature of 4/4. The tempo marking at the top left indicates a quarter note equals 40 to 50 beats per minute. The piece begins with a dynamic marking of mezzo-forte (*mf*). The notation includes various rhythmic values such as eighth notes, sixteenth notes, and dotted rhythms, along with phrasing slurs and articulation marks like accents and breath marks. A double bar line divides the music into two measures. The final measure features a triplet of eighth notes.

(詠頭) × × ⊗ × × ○ × ○ × ○ × ○ ×
 おー ー ー ー ー じょうー ー は ー

× × × × ⊗ × ○ × ⊗ × ○ ×
 よ にや すーけ れーど みー—— ー——な

$\otimes$ $\otimes$ $\times$ $\times$ $\otimes$ $\otimes$ $\times$ $\times$ $\circ$ $\times$ $\circ$ $\times$
 ひ いー と ーの ま こ と の

[illegible]

○ × ○ × ○ ○ × × ○ ○ × ×
こ こーろ な ー く ー て



○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
こ ーそ せ ェ ー ね ー

し じょう しん 至 誠 心 の 御 詠 歌

「さんじん
三心の中の至誠心のこころを」

往生は よにやすけれど みな人の まことの心 なくてこそせね
(法然上人御作)

題意 ^{し じょう しん}至誠心、^{じん しん}深心、^{え こう ぼつ がん じん}廻向発願心の三心の中、至誠心はお念仏を申す信仰の基礎であり、真実心のことです。真実心の反対は^{こ け しん}虚仮心で、人目を飾り外目と中味が異なる心です。至誠真実は飾らない素直な心のことです。

大意 お浄土に往生することは、ほんとうはたやすいことですよ。しかし、どんな人でも至誠真実の心がなくてはみ仏の願力にかなわず、往生を不可能にしてしまうのです。どうぞ心も振る舞いも共に誠の心で念仏相続して下さい。

参考 ・信をば一念に生ると信じ 行をば一形にはげむべし (法然上人)
・只申せ 申す内にはおのずから 深きまこともおこりこそすれ (無能上人)

ポイント注意

- 1小節目のシンコペーション、2・3小節目の大きいシンコペーションをしつかりと。
- 「まことの」は4拍子の強弱のリズムを強調します。

鹿ヶ谷法然院の御詠歌（常念調）

曾 我 晃 也 作 曲

♩ = 50 ~ 60



○ × × ○ × × ○ × ×
 [詠頭] これーを み ん — — [斉唱] おり お り



○ × × ○ × × ○ × × ○ ○
 — ご と に — おもい で — て なむあみ—だぶと



○ × × ○ × × ○ × × × ○ ×
 なむ あ み だ —ぶ と — つ ね に つねに



○ × × × ○ × × ○ ×
 と — — — な え — — よ —

山城の国 ^{ししがたに} 鹿ヶ谷 法然院

これを見む おりおりごとに 思ひでて 南無阿弥陀仏と つねになへよ
(法然上人御作)

お歌は、十二箇条の念仏往生に関する問いに対して、法然上人が慈悲深くていねい
にお導き下さった問答形式の文章の末尾につけられた付属勸奨のお歌です。

『十二箇条問答』より

◇罪業は石のように重くとも、本願の船に乗ってしまえば、生死の迷いの海に沈むことなく、
必ず往生します。自分の罪の重さを思って本願の勝れた力を疑ってはなりません。

◇人の心はつねに名声や利益を求めて濁っていますが、念仏のマニ珠を投げ入れると心の水
は自然と清くなり往生ができます。これは念仏の力です。心が荒れる時も仏力を頼みま
しょう。

◇毎夜寝るごとに臨終の思いで十念し、いつも念仏を忘れないようにしなさい。

大意 この問答を見るたびごとに、折にふれ事にふれて、私が伝えたみ仏の大慈悲を思い出
して、南無阿弥陀仏と常にお念仏を称えなさいよ。

ポイント注意

- 半拍休止から立ち上がる音のアクセントはしっかり。
- 4拍子の「つねに」と、2拍子の「つねに」のアクセントの違いに注意。

蓮のうてなの御詠歌（浄蓮調）

♩ = 66~72 ぐらい

曾 我 晃 也 作曲



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
〔斉唱〕 さきーだ たーば さきーだ たーば



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
 おくる る ー ひ と を まちーやーせ ん は



⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗
 な の うて な の は な のうてな—



$\otimes \otimes \otimes$ $\circ \times \circ \times \circ \times \times$ $\times$
 の な か ばのこ して —

はちす

蓮のうてなの御詠歌

さきだたば おくるるひとを まちやせん はなのうてなの なかばのこして

法然上人は「えしやじょうり会者定離は常の習、今はじめたるにあらず。何ぞ深く歎かんや。宿縁空しからずば同一蓮に坐せん。浄土の再会、甚だ近きにあり。今の別は暫くの悲しみ、春の夜の夢の如し。しんぼう信謗ともに縁として、先に生れて後を導かん。いんじょうえん引摂縁はこれ浄土の樂なり」と仰せられています。

念仏往生人は神通自在の徳を得、菩薩の行が出来る力をそなえています。念仏有縁の方の臨終にはその方が一番親しい分かりやすい生前の姿で、仏聖衆と共にその方の眼前に現れ、浄土に間違いなく往生出来るという確信を持たせ、安心して正念に住して勇んで浄土に往生できるように助け迎えて下さいます。

大意 私が先にお浄土に生まれましたら、後からお浄土に来られるあなたのために、はちす うてな蓮の台ととのを調べてお迎えいたします。

ポイント注意

- 「はなのうてな」から明るい声で、「はな」が「あな」にならないように。

二世安楽の御詠歌（安楽調）

松 濤 基 作曲

♩ = 50~60
mp



○ × ○ × × ○ × ○ ×
〔詠頭〕 の ち の よ も 〔斉唱〕 の ち の よ も



○ × ○ × ○ × × ○ × ×
こ の よ も と ー も に な ー む ー あ み ー だ ぶ ー



○ × ⊗ ⊗ ⊗ ⊗
っ ほ と け ま か せ の ほ と け ま か せ の



○ × × ⊗ ⊗ ○ × × ○ × ×
み ー こ ー そ や ー す け ー れ

二世安楽の御詠歌

後の世も この世もともに 南無阿弥陀仏 仏まかせの 身こそやすけれ
(無能上人御作)

無能上人(1683～1719)江戸中期の高僧。17歳で得度出家し、十万遍以上の日課念仏をつとめ、36歳で念仏のうちに入寂されました。この激しい修行中に多くの和歌を民衆伝道のために作られ、多くの人々を教化されました。

無能上人は、『いろは御和讃』などで「念仏行者は後の世は必ず往生して神通無碍^{むげ}の力が得られる。この世はみ仏のお護り導きの中に過ごさせていただき、一切帰依とお任せする時、うろたえ不安を越えて、安らかな信仰の世界が開けます」とお諭し下さいました。

- ・頼むぞよ 願う心はよわくとも 誓いの御手のつよき力を(無能上人御作)
- ・かりそめの 契りも今は法のはし またかえり来て西へわたさん(無能上人御作)
- ・南無阿弥陀 ほとけまかせの心には 思ひわつらふ事の端もなし(無能上人御作)

大意 後の世もこの世も共に南無阿弥陀仏と、仏様に任せ切ってお念仏申す身になってこそ、本当の安らぎがいただけます。

ポイント注意

- 半拍休止から立ち上がる声はアクセントしっかり。
- 二拍目から立ち上がる声はソフトに。

青龍寺の御詠歌（秋月調）

♩ = 60 ぐらい

松 濤 基 作曲



○ × ○ × ○ × ○ ×
 (詠頭) たつ そ ま や — たつ—そ ま や



○ × ○ × ○ × ○ ×
 (斉唱) な む あ み — だ ぶ つ の こ え — ひ く は ァ —



○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×
 こ え — ひ く は に し に い ざ な う — に し に い ざ な う



○ × ○ × ○ × ○ ×
 あ — き — — の よ の つ き

比叡山 黒谷 青龍寺

たつ^{そま}杣や 南無阿弥陀仏の 声引くは 西にいざなふ 秋の夜の月

(天台座主 慈鎮和尚御作)

比叡山西塔黒谷の青龍寺は、法然上人が18歳から25年間勉強修練なされ、この地の報恩蔵で一切経を五度、善導大師の著述を三度読まれ、浄土宗開宗の確証を得られた尊い御霊跡です。慈鎮和尚（慈円大僧正・1155～1225）は、九条関白兼実公の弟で、四度も天台座主になられた名僧で、著書に『愚管抄』や歌集『拾玉集』があり、歌人としても有名で、『千載和歌集』『新古今和歌集』以下15の勅撰集、その他を合わせて六千首以上の和歌が現存するといわれています。

◎慈鎮和尚御歌

- ・おほけなく うき世の民に おほふかな わがたつ杣に 墨染めの袖 (百人一首)
- ・おろかなる 心なれども 思ふことは 往生浄土 臨終正念
- ・よもすがら したふ心を てらさなん 西にかたぶく 山のはの月
- ・極楽を ねがへとばかり をしえてや ただ西へのみ 月は入るらむ
- ・ただひとり 残りて人を 救ふべき あみはあみだの 名にこそ有りけれ

大意 この比叡山で南無阿弥陀仏とお念仏を続けていると、秋の夜の冴えわたるお月様も、西方浄土へと導いて下さいます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

語句 たつ杣：「あのくたらさんみゃくさんぼだいの仏たち 我立杣に冥加あらせ給え」と日枝の杣山に比叡山寺を建てた伝教大師最澄の祈願文により、以後比叡山を指す言葉となった。

ポイント注意

- 「にしにいざなう」は歯切れよくリズム強調。

増上寺の御詠歌

♩ = 50ぐらい

松 濤 基 作曲

mf *f*

○ × ○ × ○ × ○ × × ○ ×

〔詠頭〕 ゴ オ ー く ー ウ ー ら 〔斉唱〕 ア く は はア ー る ー

mf *p* *mf*

• × ○ × ○ ⊗ × × × × × ×

け エ ー き く ウ ウ ー に ー と オ ー お ー も ー い し ー

f *(V)*

○ × × ⊗ ⊗ ⊗ × ○ × • ×

に な ー む ー あ ー み だ ア ぶ つ ウ ー に

mf *rit.* *p*

○ × ○ × ○ × ○ ×

か ー ー よ う ー オ ー あ し も と

武蔵の国 大本山増上寺

極楽は 遙けきくにと おもひしに なむあみだぶつに かよふあしもと

(大本山増上寺八十二世性誉上人椎尾辨匡大僧正御作)

◇性誉上人（85歳）講話『中陰なき浄土教』より

「法然上人の御開きになったお念仏は、一声の南無阿弥陀仏の中にも、一切の仏の功德が納まっています。念仏者の喜びは、いつも阿弥陀仏のお徳をこうむり、信仰の喜びと明るさに目覚め、命終に迷わず、すぐに往生させていただけることです。また、往生人は往きっぱなしでなく、阿弥陀仏のみ元で威神力を向上して、明るい喜びを増し、残れる人の力となって働いて下さいます。これは極楽からの廻向で、還相廻向げんそうえこうといひます。往生を願う往相おうそうの念仏者は阿弥陀仏始め観音勢至や先立ちし人の還相に出会い、そのお育てをこうむります。私は、年毎に還相の養いを受けていることの実感を、はっきり力強くいただけるようになってきました」と、大僧正はお導きくださいました。

大意 極楽は遠い遠い存在と思っていました。しかし、今は南無阿弥陀仏の一念一念に、身は現にここに居ながら、身近に親しく極楽の聖衆と通いあう尊いご縁をいただいています。

ポイント注意

- 「くゥにとォ」の「と」の強声をうけて「ォー」と小さく。
息つぎして「おもいし」と続きます。

善導寺の御詠歌

♩ = 60ぐらい

松 濤 基 作曲



〔詠頭〕 〇 × 〇 × 〇 × × 〇 × 〇 × 〇 × ⊗ 〔斉唱〕
よ し - み ず の な が - れ お お き く お



〇 × 〇 × 〇 × ⊗ × × × ×
お - き く ち と せ が わ ひ - ろ - め ひ ろ め ひ ろ め



⊗ ⊗ ⊗ ⊗ 〇 × × 〇 × × ⊗ ×
た ま い し ち ん ぜ - い こ く し

筑後の国 大本山善導寺

吉水の 流れ大きく 千歳川 ひろめたまいし 鎮西国師

(大本山善導寺六十三世愚誉上人一田善寿大僧正御作)

浄土宗第二祖鎮西国師^{しうこ}聖光上人は、善導寺を中心として元祖法然上人の「すべての仏教の行き着くところは南無阿弥陀仏に極まる」というみ教えを努力して広められ、また三祖良忠上人を得て浄土宗の基礎を築られました。鎮西国師は「赤ちゃんがお母さんを離れて生きていけないように、またお母さんも赤ちゃんを離さないように、いつも仏を離れず常に仏様のお護りに遇いましょう。仏様も私を離しません」「お念仏の頂き方は今死ぬと思えば、真剣に心から念仏ができ、生かされている現在が一段と尊く価値あるものとなります」と、ますます念仏が深められるよう導かれました。著書の『末代念仏授手印』は五重相伝の二重の伝書です。

愚誉上人は昭和57年（1982年）、大本山善導寺法主に就任。昭和61年寂。世寿78歳。二祖鎮西上人の法灯を継ぎ、布教宣布に多忙の中でも、教誨師として受刑者を導き、俳句の指導等で更生につくし、「死刑囚の父」と呼ばれ、俳人としても著名です。俳号牛畝。

大意 吉水の法然上人のお念仏の御^{みおし}教えを、正しく弘く長く伝えて下さった二祖鎮西国師のお徳を讃え感謝いたします。(千歳川は筑後川の別名)

ポイント注意

- 詠頭「よしみず」の「よし」はシンコペーション。したがって「よ」を軽く、「し」にアクセントつける。
- 「ながれ」の「な」はウラ声でソフトに。
- 「おおきく」の「お」の発声は奥から出す。
- 「こくし」の「し」は感謝と畏敬の念をこめて音をしっかり保つ。

善光寺の御詠歌

♩ = 50ぐらい

松 濤 基 作曲

mp *mf*

〔詠頭〕 ○ × ○ × 〔斉唱〕 ○ ○ × ○ ○ ×
ふみまよ-う ふみま-よう ころのや みを てらしませ --

mp *mf*

○ ○ × ⊗ ⊗ ⊗ ⊗
てらしませ わしのみや-まに わしのみや-まに

f *mf*

⊗ × × ⊗ ⊗ ○ ×
の-ほ -- る つ- き イ-

rit. *molto rit.*

○ × ○ ○ × ○ ○ ×
か ア- げ -

信濃の国 大本山 善光寺大本願

ふみまよう 心のやみを てらしませ わしのみ山に のぼるつきかげ
(大本山善光寺大本願第百十九世玉誉上人 大宮智栄尼公大僧正御作)

わし
驚のみ山とはインドの霊鷲^{りょうじゅせん}山のことで、お釈迦様がお念仏の教えを説かれたところです。
このお歌では念仏の声するところは、どこでも仏様のお出ましをえて、お導きをいただく所
という意味で、目の前の山を霊鷲山に見立てておられます。

①《瞋^{いか}り、貪^{むさぼ}り、愚痴^{ぐち}の煩^{わずら}い悩みは、どうしても離れないのが人の本性。それゆえにこそ、
捨てず導き護り向上せしめる、阿弥陀如来の慈光を仰ぐ心を詠まれました。》

②《大宮智栄尼公上人（1885～1984）は明治帝、大正帝の東宮侍従大宮以季子爵^{もちすえ ししやく}の次女として
誕生し、明治30年（1897）12歳にて善光寺に入山得度し、自ら忍の生活を通されました。
全国を巡錫し、積極的に人のため世のために生涯を捧げられました。》

- ・生涯を 弥陀につかえて あたたかし（大宮智栄尼公上人作）
- ・法（のり）のふみ ひもときしより おろかなる 心のやみぞ 晴れわたりける（同）
- ・明らけく 世々にかがやく 名も高き よしみつ寺の 法のともしび（同）

大意 闇路に迷う私を、あの山にのぼる月の光のように、如来様のお慈悲の光りで心の中ま
で明るく照らしお導き下さいませ。

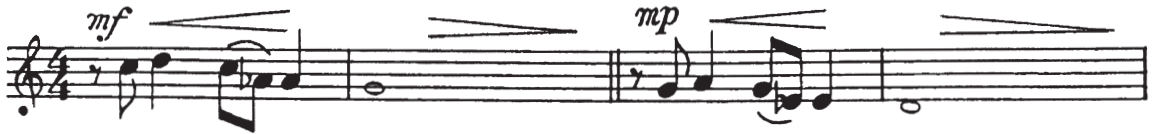
ポイント注意

- 女性的にやさしく唱えます。「わしのみやまに」はたたみかけるように繰返して、「のぼる」と力強く、その後はゆったりと静かに。

鎌倉光明寺の御詠歌（回顧調）

曾 我 晃 也 作 曲

♩ = 50 ぐらい



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
 (詠頭) おし えーお く (斉唱) おし えーお く



○ × × ○ × × ○ × ○ × ○ × ×
 この こと - の は の ゆく す-え を



⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗ ⊗
 おもいわすれず おもいわすれず わ れ - を



⊗ ○ × × ○ × ○ × ○ × × ×
 - と ぶ ら - - え -

相模の国 大本山光明寺

教へおく この言の葉の 行く末を 思ひ忘れず われをとぶらへ

(浄土宗第三祖記主禅師然阿良忠上人御作)

このお歌は、上人が71歳の時に書かれた『記主禅師一枚起請文』の結びのお歌です。その内容は「二祖様よりお伝えいただいた念死念仏の教えは、これ以上大切な教えはありません。念死とは絶対に逃れられない死を目前に置いて思い、念仏とは絶対頼みとなる本願を信じて南無阿弥陀仏と申すことである。また、命終のその瞬間がお浄土に生まれる時とはつきり心に決しておくことが大切です。この外に別の奥深いことはないことを三宝に誓います」と示され、この御歌を記し、手印を押されています。

大意 念死念仏のこの上ない大切な言葉のいわれを教えておきます。この二念を決して忘れることなく、自分の身をよくよく見つめて真剣に念仏してください。

語句 ゆく末：来歴。素姓。 訪(とぶら)う：尋ね求める。詮索する。

ポイント注意

- 半拍休止からは力強く立ち上がる。
- 「おもいわすれず」はリズムカルに。

選擇集の御詠歌

心にしめて 落着いて

松 濤 基 作曲

♩ = 40~50

mf

み ほ と け の ほ ん が ん

[斉唱]

mf

ぐ ぜ い を お ろ ー が み ー て

mp *mf* *f*

念 ぶ ー つ ね ん ぶ ー つ ね ん ぶ つ い ち ず に

rit. *ff* *molto rit.*

生 き よ も ー ろ び と

選擇集の御詠歌

み仏の 本願^{ぐぜい}弘誓を おろがみて 念仏^{いちず}一途に 生きよ諸人

(浄土門主・総本山知恩院門跡第八十六世心誉上人中村康隆猊下御作)

『選擇本願念仏集』は、「往生のためには念仏が一番尊い行である」という内容を説かれたものです。お念仏は、だれでもいつでも出来る易しい行であり、またどの行よりも功德が勝^{まさ}っており、仏の願いに合致する行です。その上、一声の念仏でも、み仏の無量の功德が備わっています。どんなに時代が悪くても、善根功德が積みなくても、お念仏は仏様の我が子と思うような大慈悲心がいよいよ働いて、必ずお救いいただける行です。尊く強く大いなる仏願力を頼み、念仏すれば、現在より未来世にいたるまで大利益をこうむります。その上、往生の本懷を遂げて、神通自在の徳を備え、清らかな法樂がいただけることが誓約されています。六方の諸仏は、念仏の尊い働きが真実であることを総出で誉め讃えられ、証明され、さらに念仏の行者を護ることを誓っておられます。このみ仏様が、選りすぐって下さった（選択）、阿弥陀仏の願いとお救いのお約束（本願）の大功德の行（念仏）で、仏教の究極が南無阿弥陀仏であることを明らかにされました。

大意 阿弥陀仏の大いなる仏願力を心からいただいて、念仏一途に共に力強く明るく尊く生かされて往きましょう。

ポイント注意

- 普通で速度で、付点音符を急がずに。「念仏いちず」を頂点に、一語一語しっかり、最後の「もろびと」は力込めて一音一音ゆっくりと。

吉水流詠歌集 音譜用

不許複製

平成12年9月25日 発行
平成25年11月1日 第15刷
平成30年10月1日 第16刷
平成30年3月1日 第17刷
令和4年9月1日 第18刷

編集 浄土宗吉水講
印刷 アド・アソシエイツ株式会社
発行 浄土宗

